



Murata High School 100th Anniversary

# 百年通信

No.6 2024,10,10 発行

創立100周年記念事業実行委員会

## 全国で8番目、宮城県で初めての

# 総合学科 開設

1995(平成7).4.1



1993(平成5)4月 職員会議で  
「4学科を発展させる形で統合し  
総合学科に改編する」方針が確認される

村田高校は各系列で「資格のとれる総合学科」への道を選んだ。  
→ 村田高校の方向性は、  
全国の総合学科の指標となった。

校内に総合学科準備委員会が発足し、1年間に34回もの会議を重ね  
「教員が主体となって作られた最初の総合学科」を目指した。



## 村田高校総合学科スタート

総合学科第1期生を対象とした新入生予備登校

→ 科目選択のため1日を追加し、2日間で実施

1年生の中途退学者

平成2～6年度(旧4学科)・・・平均12名

平成7年度入学生(160名)・・・1名

新しい村田高校が確かに始まった。

### 6系列

国際教養系列：「普通科文系」を想定した系列

自然環境系列：「普通科理系」を想定した系列

4クラス 社会福祉系列：介護福祉士及びホームヘルパー1級が取得できる系列  
(160名)

コンピュータ・ビジネス系列：「商業科」を想定した系列

メカニカル・テクノロジー系列：3級自動車整備士の取得を目標とする系列

メカトロニクス系列：電子機械科を前身とする系列



## 平成9年度 総合学科完成年度

2・3年次の共通履修(週30時間のうち22時間 2時間は1-3年次共通履修)始まる  
平成9年度卒業生の進学者 前年度から倍増

中学生数の減少  
系列選択の偏り



→ 進学率の上昇は、社会状況の変化を背景とするものだが、  
総合学科の設置によって対応が可能になった

## 平成18年度 総合学科第2のスタート

## 制服一新

3クラス(120名)

4系列



言語・自然科学系 ⇐ 国際教養系列 自然科学系列

介護福祉系列 ⇐ 社会福祉系列

商業実践系列 ⇐ コンピュータ・ビジネス系列

→ 機械・自動車系列 ⇐ 情報システム系列 メカニカル・テクノロジー系列

平成26年度入学生まで 自動車系列

→ 平成12年度入学生まで メカトロニクス系列



リーマンショック(平成20) ⇨ 東日本大震災(平成23) ⇨ コロナ禍(令和2~5)

荒波を乗り越え ⇨ そして **宮城県村田高等学校 創立100周年**

## 国際教養系列のある村高の修学旅行

## 4系列新制服となった新生村高



## 国際交流：韓国への修学旅行



2000(平成12)年度卒業生(総合学科4期生) 談

韓国への修学旅行を前に多くの準備がありました。パスポートの申請から始まり、簡単な韓国語を学んだり、出発するまでがとても大変でした。実際に韓国へ行ってみると、何もかもが新鮮で、多くの時間をかけた事前学習が大いに役立ちました。韓国での一日一日は、とても短いものでしたが、一番印象に残っていることは、永楽女子商業高校との交流会でした。韓国の高校生の皆さんが、私たちを温かく迎えてくれて、和やかに交流会を行うことができました。簡単な韓国語の会話を学んでいた私たちは、片言でしたが韓国語で会話をしました。

交流会での出し物で、私たちは村田町の伝統文化である「七福神舞」を披露しました。韓国で日本の文化をどう受け止められるのか、多少不安でしたが、永楽女子商業高校の皆さんは、真剣に私たちの舞いを観てくれました。失敗することなく、「七福神舞」を披露できた時の達成感は、言葉にできないほど嬉しいものでした。短い時間の交流会でしたが、国際交流に必要なのは、言葉だけではなく、「互いの国の文化を受け入れようとする心」が大切なのだということを学びました

国道に並行して流れるイムジン川の流れ。「統一展望台」など厳しい現実も目にしました。私たちの住む日本では考えられない光景でした。改めて、平和な日本の素晴らしさを実感しました。

## 「プラン」について (内田より)



高校で「柔道」の授業(1・2年)があり、2月には学年別に柔道大会も開かれていた。1年は各クラス10名、2年は20名が選手として出場する団体戦で、大会前には出場する生徒の多くが柔道場で柔道部員とともに稽古をしていたものである。

大会は予選リーグ(4クラス×2組)を経て、各組上位2クラスが決勝トーナメントを行う。決勝は学年全員注視の中で1試合ずつ進められ、2月の厳冬期にもかかわらず柔道場は熱気に包まれた。左右どちらの組手からでも技を掛けることができたウチダ。1年・2年と出場し、両年ともクラスの優勝に貢献、高校時代の数少ないハイライトとして、今も野球部の試合より記憶は鮮明だ。特に、2年生の決勝戦(5組vs7組)は忘れることができない。ウチダは5組の16人目で、そこまで7勝5敗3分、対戦相手はバスケ部の主将(以下S原)である。ここで勝てば残りのメンバーから考えて優勝は確定的で、負ければ最後の一人まで分からなくなりそうな状況であった。ウチダは組手争いはせず、右組から背負い投げで仕留めるプランを考えた(「一本」が取れなければ崩れた後、袈裟固めで抑え込む)。180cm近くあるS原は足払いで揺さぶりながら力任せに場外近くまで押し込んで、大外刈りをかけてくるに違いない。そこで、押し込まれながらS原が大外刈りを掛けに釣り手に力を入れる瞬間、S原の懐に入っの背負い投げである。「はじめ！」で試合が始まると、予想通りS原は右組から押し込みながら執拗に足を払ってきた。藤井七冠もかくやの読み通りの展開だ。ウチダは下がりながらタイミングを計り、相手の懐に入り背負った。長身のS原が宙を飛んだ、決まった！と思ったが、S原は畳に落ちるところで体をひねり、肩から落ち「技あり」となった。さすがバスケ部主将である。しかし、すかさず、袈裟固めに入り、渾身の力で25秒抑え込み、「合わせて一本」で勝った。試合は40秒ほどで終わり、最終的に9勝7敗4分で2年5組は優勝した。

さて、今でも、動きを再現できるほど、プラン通りに試合を運べたウチダであるが、卒業後の人生では対峙した相手には投げられ、見えない相手にも浮き落として転がされ、痛い思いをしてきた。先日痛恨の失態で、30歳を過ぎた娘に厳しい叱責を受けてしまうなどということがあった。半生を振り返れば、あの40秒だけがプラン通りに物事を運べた唯一の出来事なのである。つまりは、日々の暮らし(仕事・私事)の中で、柔道大会にかけたほどの準備をしていないということなのだろう。このまま人生を閉じては悔いが残る。これからの日々、プランを立て、しっかりと準備をして暮らしていこうと思う。

ところで、生徒諸君。「産業社会と人間」で練り上げたライフプランを意識して日々の学校生活に取り組んでいるだろうか。立ち止まってよく考えることだ。高校生活は短い。高校生活に悔いを残してはならない。



## 新生村高一期生の青春



2008(平成20)年度卒業生(総合学科12期生) 談

制服を一新、4系列となり、総合学科第2のスタートを切った村田高校の新入生として入学し、皆で勉強・部活動・学校行事に取り組みました。

最後の仙南総体、自分の力を最大限に出すことができた最高の大会でした。大会に懸ける気持ちは人一倍でしたが、調子が上がるところか、怪我をするなど大きな不安を抱えていました。不安なまま試合に臨んで、いいことがないのは、よく分かっていました。今できる精一杯のことをやりきり、存分に楽しもう、自分のプレーをしよう決めて臨んだ仙南総体でした。

まず、団体戦で沢山の方々に応援していただき準優勝という素晴らしい結果を残すことができました。昨秋の新人大会では初戦負けでした。その時の悔しさが私たちをここまで成長させたのだと思います。やはり、負けから学んだものは大きかったと実感しました。

個人戦では、後輩の頑張る姿からとても勇気をもらい、ダブルス優勝。最高のパートナーには、とても感謝しています。本当にありがとう。最後に行われたシングルスは、団体・ダブルスの疲れもありましたが、皆の応援が力になり、最後まで強気で戦い、優勝トロフィーを手にすることができました。仲間、先生、親など応援してくださった方々に心から感謝しています。村高バドミントン部の主将として頑張ってきて、本当に良かったと思います。部活動は、私の青春そのものです。